

第29回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：優秀賞（高学年の部）

タイトル：だれかの大切なもの

氏名：佐藤 夏羽（サトウ ナツハ）

小学校名：東京都 荒川区立第七峡田小学校 四年

私がまだ三年生の時のことです。いつもの友達五人で帰っていると、ちゅう車場のしげみの近くにキラキラ光るものを見つけました。みんなでそれに近付いてみると、それは五十円玉でした。私達は顔を見合わせて、

「どうする。」

「どこに届けるの。学校かな交番かな。」

「だれが届けるの。」

と、話し合いました。

「じゃ、じゃんけんで決めようよ。」

「そうだね。いいと思う。」

「じゃーんけんぽんっ。」

じゃんけんで負けた人が、交番に行く事になりました。私は正直めんどくさいし、交番に行った事がなかったので、少しこわいな、負けるのはイヤだなと思いました。勝負は一回でつきました。みんなはパー、私はグー、私が交番に行く事になりました。

家に帰り、お母さんにお金を拾ったので、いっしょに交番に行ってほしいと話をしました。お母さんが、いいよと言ってくれたので、ちょっと安心しましたが、五十円なんて少しのお金だし、落とし物で持って行ったら、忙しいおまわりさんに迷惑かからないのかなと心配でした。でも、私の三さいの弟が二十円をにぎって、うれしそうにおかしを買っていた事を思い出して、少ないお金だけど、だれかの大切なものかもしれないと思い直しました。

交番はよく通る公園のすぐ近くにありますが、私はドキドキしながら交番のとびらの入口で立ち止まりました。緊張してしゃべれないし、動けないでいると、中からおまわりさんが、

「どうしました。」

と優しく声をかけてくれたので、私はやっと、

「五十円玉を拾いました。」

と答えることができました。おまわりさんは、

「ありがとうございます。わざわざ届けてくれたんだね。どこにあったか、少しお話を聞いてもいいですか。」

と言って座るいすを用意してくれました。

おまわりさんは私の正面に座り、書類を作りますね。と、地図をひろげました。まだ緊張していた私は、上手に答えられませんでした。おまわりさんは、ゆっくり話を笑顔で聞いてくれました。やっと全部話し終わると、おまわりさんが、さっきよりもっと優しい笑顔で、

「ご協力ありがとうございました。これからも落とし物があったらお願いしますね。とても良かったですね。」

と、言ってくれました。

私は、できあがった書類を見て、私、だれかの大切な物を大切にできたのかな。と、心の中でパチパチキャンディーがはじけているみたいな感じがして、ちょっとはずかしくて、くすぐったくて、自然と笑顔になっていました。